

孤立・孤独対策官民連
携プラットフォーム

令和6年度第2回
シンポジウム

2025年1月24日
15:10～18:10

ライブ配信

第一部：解説

「らしさと孤立・孤独」

宮本みち子
放送大学/千葉大学名誉教授

若者世代から中年世代の貧困化と孤立化

- これまで標準型とされてきた成人期のライフスタイル＝結婚、子育て・教育、持ち家、貯蓄が条件、が弱体化
- 脆弱な生活基盤しかもてない人々（とくに非正規・低所得層）の増加を伴って進行
- 子ども期－若者期－中年期を通して、孤立と貧困が継続する傾向

<若者期>

親に頼ることのできない若者の存在

もっとも厳しい状況に立たされているのは

- ・社会的養護出身者
- ・貧困・虐待・ネグレクト下で育った子ども・若者
- ・困窮する若年母子世帯など

子育て期の“標準世帯”というものの変容・崩壊

—若者の巣立ちを支えることのできない家庭—

“親任せ”の若者政策においてはこれらの若者は放置されている

懸念される若者の存在

■ 障がい者の範疇には入っていないが、病気や就労困難その他の生き難さを抱えて長期間にわたって無業のまま、あるいはひきこもっている若者の比率が、年齢が上がるほど高くなる傾向

（労働政策研究研修機構,2019『若年者の就業状況・キャリア・職業能力開発の現状③』JILPT資料シリーズNo.217）.

■ 社会的に孤立し、その存在が社会的に把握されない若者

家族を形成する条件がなく親元にいるか、ひとり暮らしを余儀なくされている

この国の若者政策の脆弱性

- 乳幼児期から思春期までが重要視され、若者期への関心は低いまま
諸外国と比較すると失業率は低い・・・>一括採用制度が今も機能しているという甘い
認識
若い人たちのことはよくわからない
もう子どもではないのだから自力でやるべきだ
- 成人期への移行の途上にある若者をどのように位置づけ、どのような政策目標を掲げて、
施策群を打ち出すのか（つまり若者政策）が明確に確立してはいない
- 「親頼み・会社頼み」で生きていけない若者が増加しているにもかかわらず手が打たれてい
ないまま中年期に入っていく

増加するミドル期 未婚者＋離婚者

ひとり暮らし
＞親と同居

- ミドル期シングルは40年間で10倍に増加
東京23区のミドル期人口の3分の1がシングル
- 貧困と希薄な社会関係のシングルが多数を占める大都市への懸念
- 行政は、高齢ひとり暮らしには着目するが、増加するミドル期のシングルには関心を示してこなかった
- ミドル期シングルが高齢期に達した段階で新しい社会問題が発生するはず

ミドル期シングルの 不安・孤立・孤独

■中高年非婚者のリスク・・・一定層の特徴

（国立社会保障・人口問題研究所 斉藤知洋氏）

- ・労働市場・社会保険・社会関係から排除されやすい
- ・貧困率、生活困難度、生活保護受給率が高い
- ・未婚男性のディストレス（主観的な不快度）がより高い

■「入院したり介護が必要になった時、世話をしてくれる人がいますか？」

孤立群・・・男性27%、女性12%

孤立予備軍・・・男性36.6%、女性33.5%

合わせて6割強

■「話し相手がいない・少ない」・・・4割

（宮本みち子・大江守之編著『東京ミドル期シングルの衝撃』

東洋経済新報社）

「役割のない個人」



多様な「役割りのある個人」へ

= 共助・共生社会
への転換

1. 多くのミドル期シングルは、非家族的な親密圏を形成する状態ではなく、孤立化のリスクを抱えている。もっと多様で柔軟な結婚と家族が社会的に承認されて、親密圏を形成しやすくなることが必要
2. 家族等の親密圏と公共圏の間に「中間圏」を広げていくこと。「中間圏」があることは、非婚化の進行に伴う孤立と孤独、生活不安と貧困を押しとどめる有効な条件
3. 標準型家族モデルが崩れていく時代にあって、従来の家族が担ってきた多様な機能をシングルも当然のこととして負うこと＝共助・共生社会に進むこと

以下は参考資料





2025/1/24

研究チーム

宮本みち子（放送大学/千葉大学名誉教授） 編著者

大江守之（慶応義塾大学名誉教授） 編著者

丸山洋平（札幌市立大学デザイン学部准教授）

松本奈何（明治大学専門職大学院ガバナンス研究科助教）

酒井計史（独立行政法人労働政策研究・研究機構
リサーチアソシエイト）

参考

ミドル期シングルの 親密圏の実態

- 女性は親(やきょうだい)と親密な関係を維持し、それが、人によっては強化されている
- 男性にはその傾向はみられない
- いっぽうで、親密圏に近い友人・知人関係が広がっているとはいえ、とくに男性シングルの「社会関係の希薄」が濃厚
- 貧困化する女性シングル(低所得シングル)
- 貧困化する男性シングル(格差が大きい)

参考

ミドル期単身者の増加＝現役世代の脆弱化・高齢期のリスク

- 全国のミドル期未婚者・離別者の半分は親やきょうだいと同居、いっぽう、東京区部の同居率は約3割で地方圏より低い
- 同居未婚者・離別者等は、限られた家族的資源に頼って暮らしを営んでいる傾向
- 親族間での共助関係が喪失する高齢期に生活上の困難が深刻化するリスク
- ミドル期未婚者・離別者の増加は、労働と家族の生活保障機能が脆弱な現役層の増加をまねく。それが将来の社会保障の持続性にも甚大な影響を与えることが危惧される

多様性のある 親密圏をめざすこと

- 西洋諸国の親密圏は、性関係が中心的位置を占めている。近代家族が変容する過程で、同棲、事実婚、LGBT、国際結婚、移民結婚（結婚を目的とする移民）など、個人が選択して作る親密なパートナー関係を国家が承認・保護するという道筋で親密圏が拡大してきた。多様な結婚やパートナー関係に対して、「家族」「家族的关系性」と同等の福祉サービスを国家が提供したことによって拡大
- 日本の親密圏は、親やきょうだいの存在が西洋諸国より大きい。そのため、結婚の柔軟化・多様化が進みにくい→柔軟化・多様化をめざす
- 家族住宅に代わる多様な生活共同体（別居パートナー、コレクティブハウス、シェアハウスなど）を発展させる。
- 未婚者、離婚者、ひとり親の多様な居住スタイルをもっと発展させる